



H a f a A d a i

令和2年6月30日
グアム日本人学校
学校たより
第2号

「教え子を師に」

校長 工藤 雅敏

私事で恐縮ですが、私は、二十代・三十代の頃、バスケット部の顧問として部活動に熱中し、来る日も来る日も、練習に明け暮れていました。

その時の教え子の何人かが、今、教職に就いて、バスケット部の顧問をしています。同じ教職に携わる者として、また、かつてバスケットを教えた者として、望外の喜びです。そんな彼らのうち二人と、以前、練習試合をしたことがあります。試合をしていくうちに、何だか、不思議な気持ちになりました。二人とも、教え方がとてもうまいのです。

「この子はパスは上手だが、ドリブルはダメ。あの子はオフェンスはいいが、ディフェンスはダメ」と、長所・短所をよく見て、きめ細かく、丁寧に教え、やらせていくのです。それがなぜ不思議かということ、実は二人とも、中学生の頃はそろって下手くそで、いつも私に叱られてばかりだったからです。

試合が終わった後、二人に言いました。

「君たちは、いつも私に怒鳴られていたよな？」

「はい、僕ら二人とも、なかなか試合に出してもらえませんでした。」

「『何で試合に出してくれないんですか？』て、先生に言ったことがあります。」

「そしたら先生は『出たかったら、うまくなれ。』て、言いました。」

「そんなこと言ったか。悪いことをしたな。」

「とんでもありません。」

彼らは、口をそろえて言いました。「出してもらえなかったからこそ、僕ら死にもぐるいで練習したんです。今でもバスケットが好きなのは、そのおかげです。」

「それに、生意気みたいだけど、出られない悲しさの中で、人生を学びました。実社会では、下手でも黙って待っていれば順番が回ってくる、なんてことは絶対ないのですからね。」「だから、僕ら、教師になって、バスケットを教えたかったんです。」

彼らは、試合に出られないことから、何かを学んでいたのです。下手で苦しみ、いろいろと考えた経験があるからこそ、子供の長所や欠点がよく見えるのです。

「初めから上手な子は、他の子がなぜできないのかわかりません。できない子の存在を認めようとすらしません。」

「名選手、必ずしも名監督ならず。できない生徒の立場に立って考えることのできるのが、本当に優れた教育者なのです。」とは、まさに、このことなのでしょう。

かつての教え子に、改めて、教えられました。